

そ の 他 の 調 査

歴史研究室・平城宮跡発掘調査部

久米廃寺（岡山県久米郡久米町） 岡山県教育委員会が実施した中国縦貫自動車道建設工事に伴う調査。1971年1月、沢村が参加した。従来知られていた塔跡の東に軒を接する仏堂跡を検出した。塔の西の仏堂は東向堂宇と判定できた。岡山県教育委員会『埋蔵文化財発掘調査中間報告 久米寺廃寺』（1970. 11）参照。

伯耆国分寺（鳥取県倉吉市国分寺字薬師） 県道つけかえ工事に伴って発見された塔跡の前年度調査にひきつづいて、伽藍配置および寺地を明らかにするために倉吉市教育委員会がおこなった発掘調査。1970年7・8月、坪井・沢村・佐藤が参加。金堂、講堂基壇および回廊の一部を確認し、寺地の東西北限がほぼ明らかになった。主要伽藍は寺地のほぼ西寄り1/3に位置することがわかった。倉吉市教育委員会『伯耆国分寺跡発掘調査報告』1（1970.3）参照。

元興寺極楽坊（奈良市中院町） 元興寺極楽坊の、境内東辺の防火壁設置工事にもなう事前調査。1970年8月、沢村・森が参加した。奈良時代の遺構として、現在の東門の中心から約15m東方に南北方向に走る築地と、これにもなう切石組みの暗渠を検出した。これは伽藍をめぐる築地の一部と考えられ、条坊研究のための好資料を提供した。また、事務所の西北に計画された釈迦院建設予定地の発掘調査を合わせて行なった。この地は、東室北階大坊や小子坊跡の推定地であったが、後世の攪乱が著しいために、明瞭でなかった。

隠岐国分尼寺跡（島根県隠岐郡西郷町大字有木） 1969年度につづいて、史跡推定にもなう、庵間確認のため行った第2次調査。1970年8・9月、町田が現地指導を行い、門と柵を検出し、隠岐国における国分尼寺の様相がほぼ判明した。隠岐島後教育委員会『隠岐国分尼寺調査報告』（1971. 3）参照。

薬師寺（奈良市六条東町） 近畿大学杉山信三氏による薬師寺伽藍の学術調査。第3年度として、食堂・僧房・経楼跡の調査。1970年7～10月、阿部・小笠原・西村・天田・西・佃・真木が指導援助した。調査の結果、食堂とその左右に大規模な三面僧房、回廊と僧房の間に経蔵の一部などを検出した。僧房は、973年に焼失廃絶したことが知られているもので、今回の発掘調査で部屋割りや内部施設、床面などの詳細が明らかとなった。床面の僧房焼失時の焼土中から、土師器・須恵器・緑釉陶器などが一括して出土した。これらのものは10世紀末の絶対年代を知りうる点で、貴重な資料である。毎日新聞社『薬師寺』（1971）参照。

第1図 唐三彩宝相華文陶枕

出雲国庁跡（島根県松江市大草町） 松江市教育委員会による出雲国庁所在確認のための第3次調査。1970年10～12月、町田が担当、坪井・鬼頭・石松・稲田・甲斐が参加した。調査の結果、7世紀後半から中世にまで存続する出雲国庁であることが確定した。松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』（1970. 3）参照。

能登国分寺（石川県七尾市国分町） 国分寺の「だいもん」跡を含む水田が工場敷地として埋立てられたのを契機とし寺域確認を主目的とした調査。1970年10月、七尾市教育委員会が実施し、河原・村上が参加した。礎石建物2棟および寺地の東を限るとおもわれる築地を発見した。七尾市教育委員会『史跡能登国分寺跡第一次調査概報』（1971.3）参照。

陶枕の調査（京都国立博物館） 大安寺出土の唐三彩陶枕の研究に関連し、京都国立博物館で開催された「唐宋の陶枕」展に出品中の遺物9点の写真・実測調査。1970年10・11月八賀が担当し、佃・高島・西村・西が参加した。とくに紋胎釉の陶枕では、表面のみ紋胎の模様をはりつけたものがあり、本体全部が紋胎のものとは技術的に差があることを確認した。

大宰府（福岡県筑紫郡二日市町） 福岡県教育委員会が行っている大宰府第6次（政庁西南地区）の調査。1970年10月、沢村が現地で指導助言を行った。また、大宰府条坊及び周辺条里の現地調査。狩野・宮沢・横田・鬼頭が参加した。福岡県教育委員会『大宰府史跡』（1971. 3）参照。

伊場遺跡（静岡県静岡市伊場） 国鉄換車場建設にともなう事前調査。1970年12月、狩野が参加し、木簡解説・整理指導を行った。浜松市遺跡調査会『伊場遺跡第3次発掘調査概報』（1971. 2）参照。

横山古墳（兵庫県姫路市横山） 業者の土砂採取にともなって、姫路市教育委員会が行った緊急事前調査。古墳時代初期の前方後円墳、石棺・壺棺・土墳墓などの埋葬遺構の群集地。1971年2月、横山・高島が現地で、指導助言を行った。

大宰府条坊（福岡県筑紫郡大宰府町五条） 福岡県教育委員会が福岡南バイパス建設にともなって実施した調査。1971年2・3月、石松が参加した。発掘地は大宰府条坊の七坊八条に推定されている所である。南北の溝・井戸・住居跡等を確認したが、いずれも中世のものと

考えられる。福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集（1970）参照。

台渡廃寺（茨城県水戸市渡里町） 水戸市教育委員会主催で行う。むこう3年間にわたる調査の第1回調査。1971年3月、田辺が参加した。この廃寺は、戦前高井梯三郎氏によって1部調査されている。今回の調査の目的は、塔跡周辺の寺域確認であった。調査の結果、塔

第3図 薬師寺僧房出土土器 1・2 緑釉陶器 3～6 灰釉陶器 7～10 土師器
11・12 黒色土器A 13・14 須恵器

跡南方と北方に東西溝、東方に南北溝を検出し、塔跡と南北溝の間にはほぼ正方形の基壇跡を検出した。また、北方東西溝に接して工房跡があり、仏像型など出土している。

美濃国分寺跡（岐阜県大垣市青野町） 道路建設にともなう大垣市教育委員会による事前調査。1968年3月、八賀・細見・伊東・宮本・安達・田辺・佃・田中・西村が参加した。本年度は金堂推定地を調査し本寺が法起寺式の伽藍配置であることを確認した。大垣市教育委員会『昭和46年史跡美濃国分寺発掘調査報告』Ⅲ（1971. 3）参照。

中の浜遺跡（山口県豊浦郡豊浦町川棚） “西南日本に於ける埋葬遺跡の総合研究”（代表金関丈夫氏）に交付された文部省科学研究費による調査。1970年3月、木下が参加。砂丘上に立地する弥生時代埋葬遺跡。7次にわたる従来の調査で東西2群の墓群が確認されている。今次は東群の周縁部を発掘。前期前半の土壙墓1、前期末～中期初の箱式石棺墓6（内小児棺3）、小児壺棺墓1、中世の土壙墓1を検出。今次で東群をほぼ全面発掘したことになる。

西隆寺跡（奈良市西大寺町） 株式会社ダイヤモンドファミリー西大寺ショッピングセンターの建設にともなう奈良県教育委員会の緊急事前調査。1971年3月、狩野・牛川・村上・藤原・小笠原・森・西・黒崎が参加した。調査の結果、西隆寺東大門跡、それにとりつく東面大垣・寺内の瓦積基壇の築地・掘立柱建物・井戸などの遺構を検出した。遺物は木簡（造西隆寺司関係）・土器・瓦・木器などが多量に出土した。石野博信・村上 昶一「西隆寺跡の調査」『吉坂 No. 18, 橿原考古学研究所（1971. 7）参照。

鳴神遺跡（和歌山県和歌山市鳴神） 和歌山県教育委員会が実施した古墳時代集落跡の緊急事前調査。溝・池などから多量木製品が出土した。1970年7月、町田・西村・黒崎・沢田が木製品の緊急処理指導を行った。和歌山県教育委員会『鳴神遺跡』（1971. 3）参照。

寿命王塚古墳出土土器 京都国立博物館に出品中の福岡県嘉穂郡桂川町・寿命王塚 古墳出土土器の実測調査を1971年1月、石松・高島・西が行なった。実測にあたっては、京都国立博物館・鈴木基親氏、桂川町教育委員会のひとかたならぬ御協力を得た。

寿命王塚古墳の副葬品は、これまでにいくども紹介されているが、土器は一括して紹介されることがなく不明な点が多かった。ここに紹介する一括の土器は、寿命王塚古墳出土土器のすべてである。これらの土器は、装飾古墳として著名なこの古墳の編年的位置を知るうえに、また、九州地方における須恵器の編年研究の資料としても貴重である。土器は蓋杯・杯・高杯・直口壺・提瓶・台付壺などの須恵器があり、大多数は暗灰色を呈する。なかにならぬ「赤焼き」とよばれる赤褐色のものがある。「赤焼き」の土器は後述のように興味ある事実があるので別述する。

蓋杯(5~8) 口径11.5~12.4cm, 杯はややひらたい底部に内傾する口縁部をもつ器形である。蓋は天井部と口縁部の境が屈曲し、外面に浅い沈線をもっている。蓋・杯の各口縁端部は内傾する面をもつ。この種の口縁端部をもつものとしてはもっとも新しい。底部および天井部外面ともやや粗いヘラケズリで調整している。

杯(14・15) 口径8~8.4cm, まるみのある底部に、内傾するがそりのある口縁部をもつ器形である。口縁端部はまるくおさめている。先述の蓋杯(4~7)より新しい型式とみられる。

高杯(10) 口径10.2cm, 高さ13.1cm, 長脚一段の透しをもつ、杯部下外面に櫛による刺突文がめぐり、脚には粗いカキ目が認められる。

直口壺(9) 口径10.6cm, 復原高14cm, 玉ねぎ形の体部に、外反する広い口縁がつく器形である。肩部にカキ目が認められ、体部下半はヘラケズリされている。

提瓶(11) 口径3.6cm, 高さ11.4cm, まるい体部に外反する短い口縁がつき、肩部には対称的に環状の把手がつく器形である。

台付壺(12・13) 裾のひらく脚台にまるい体部の壺部分がつく器形である。壺部分が破損して全貌を知りたい。壺部現存部上半に横カキ目、下半に叩き目がある。脚台には長方形と三角形のすかしが三段と二条の沈線が4段、櫛描きのこまかい波状文が脚台をめぐっている。なお、脚台の高さは約27cmある。

以上の一般的な須恵器のほかに、赤褐色硬質の土器(1~4)がある。これらは先述の須恵器と同様ロクロ成形によっており、器形も同様である。胎土は精良で、須恵器にくらべてほとんど砂を含んでいない。また直口壺(4)の底部はナデで仕上げているが、杯の(1~3)底部外面は、中央部を一方にケズリ、その周辺を左まわりに5~6回に分けてケズる。この底部ケズリは一般の須恵器の杯類の底部ケズリと手法を異にしており、単に、須恵器の焼き損じとはいえない。すすめていうなら、この「赤焼き」の一群の存在は、この種の土器の比較的多く分布する九州において、一般の須恵器工人とは異った系統の工人集団の存在がうかがえる興味ある事実である。今後の研究に期待したい。(高島忠平・西 弘海)

第 4 図 寿命王塚古墳出土土器